開催地名：青森県五戸町	
開催日時	令和元年 11 月８日（金）　　13：00 ～ 15：00
開催場所	アピル五戸
語り部	山田　修生　　（宮城県仙台市在住）
参加者	自主防災組織未設立自治会等の会長・役員等　約 40 名
開催経緯	十勝沖地震発生からかなりの年月が経過し、経験者の減少や高齢化などから、自主防災組織の活動が停滞している。また、低年齢層など地域住民の危機意識が低下しており、災害伝承が課題となっている。今回、語り部の方のお話を伺い、防災活動の啓蒙につなげたい。
内容	（１）はじめに 今一度、東日本大震災の私自身の体験をお話したい。私は所用で自宅に帰っていたが、突然、地下からすごい勢いで突き上げる感じの揺れを感じた。体がゴム毬のように床からボーンと上がる。そして縦揺れ、横揺れ、今度はななめ揺れと、どうしたら良いか分からないような揺れが長く続いた。そのあと、大きな津波が来ると思い、住んでいるマンションの居住者を避難所へ誘導した。これまで実施してきた避難訓練は町内会の有志が集まってやっていたが、町内会ごとの自主防災組織は全く稼働できず、家族、あるいは近所同士の小単位で避難を余儀なくされたのが実情である。避難訓練は土曜日や日曜日など、就業者にとって都合の良い日時に行われているのが現状であるが、東日本大震災のように平日の午後、就業者（特に男性）がほとんどいない時間帯に発生する可能性も充分あるわけなので、例えば女性を中心とした避難訓練も実施していただきたい。 （２）避難所運営について 避難所では 名簿班、総務班、情報広報班、救護班等に役割を分担するのが望ましい。とりわけ総務班は、地域ごとのスペースの割り振りを担当するが、ダンボールで各自の区分を仕切る際に、必ず世帯ごとに、よその世帯を通らずに通路に出られるようなレイアウトで設定することが大切である。情報広報班も重要な役割を担う。伝達事項は必ず全員に伝える必要がある。そのためには情報を掲示板に貼り出すことが有効である。さらに、紙にマジックで良いので避難者の名前を全員書き出して掲示してほしい。これは安否を確認しにきた人のためにも役立つ。また、避難者名簿を扱うのもこの班だが、くれぐれもプライバシーには注意してほしい。むやみに避難者名簿を配らないことである。食料については避難者全員への配布が大前提である。全員分が揃うまで一切配らないことが大切である。

	避難所では 携帯ラジオが役立った。暗闇の中でもラジオがあると安心できる。避難するときは携帯ラジオと懐中電灯、薬、できれば乾電池を持つことを心がけてほしい。預金通帳や印鑑などは必要ない。 （３）学校と連携する 避難訓練では、地域ごとに学校と連携することを考えてほしい。これは子どもたちを守るために必要なことである。仙台には、仙台地域防災リーダーが現在600名くらいいる。そこに小学生、中学生も巻き込んで、予備軍として活動してもらうことを推進中である。先日の避難訓練でも、小・中学生に参加してもらった。中学生が小学生をうまくフォローアップしてくれ、とても助かった。発電機の訓練では、年配者はなかなかうまく作動させられなかったが、中学生がすぐに上手にやってくれた。幼少のうちから防災対策と技術を身につけてもらうことが大切である。これは私の持論であるが、「自然災害は避けられない、ならばもう腹を決めて共生しよう」、そう考えるのが望ましいと思う。身に付けた知識・経験の全ては決して裏切らないので、そういう意味で、防災訓練は絶対必要ですし、とにかくいろんな形でいろんな状況を想定して訓練を積み重ねていただければと思う。
開催地より	住民に対して防災の意識を持ってもらうことは難しいが、災害の記憶が薄れている当市では、このような体験談を聞くことは、大変大事なことであると感じた。防災訓練も平日の災害発生を想定した内容で行い、女性や高齢者など多くの方に参加してもらえるよう工夫したい。